ユニバーサル・ミュージアムが「近代」を問い直す

思想史と人類学の対話

2018年12月1日(土)午後2時〜4時30分

東海大学松前記念館 1Fエントランスホール

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1 東海大学湘南校舎
お問合せ：課程資格教育センター 篠原聰 0463-58-1211(内2135)／ss062876@tsc.u-tokai.ac.jp
主催：東海大学課程資格教育センター
共催：松前記念館・東海大学文明研究所「20世紀人文学の方法論的再検討」第8回研究会

芸術思想史 元横浜国立大学教授
木下 長宏

文化人類学 国立民族学博物館准教授
広瀬 浩二郎

プログラム

午後2時 挨拶／朝倉徹(課程資格教育センター所長)
午後2時5分 趣旨説明
午後2時10分 基調講演／美術史以前 無文字文化と文字文化—木下長宏
午後3時 休憩
午後3時10分 対談／木下長宏×広瀬浩二郎 司会：篠原聰(東海大学課程資格教育センター)
午後4時10分 質疑応答
午後4時30分 終了 17時まで延長する場合がございます

公開シンポジウム第5弾

ラスコーの洞窟と敦煌莫高窟の両方を訪ねた美術史の研究者はボクくらいしかいないかもしれない――とボクはときどき、みんなの前で自慢する。

この両方の洞窟を訪ねて、ボクは〈美〉を経験するとはどういうことか、〈美〉の〈歴史〉を考えるということはどういうことかを、はじめて根源的に考え直す機会を得られた。それまで、どのラスコーや敦煌の本からも学ばなかった〈感覚〉が動き出し、予期しなかった〈発見〉があった。大乗寺を訪ねたときも、既刊の解説書や美術史に書いていない経験をした。

たとえ現場に行けなくとも、実物をみることができないときでも、じっさいにはどんなふうなんだろうと想像力を働かせていくこと。〈自分〉の感覚でその対象へ反応し自分の〈言葉〉でその反応を語り出すことが始まるのは、そのときだ。それは、たやすくできることではないが、しかし、他人の権威の言葉に安住しないで、自分の言葉を探し続けることは、尽きない喜びである(苦しみもついてまわるけれど)。

そのことに気づくとき、きっと、他者の言葉へも、よく耳を傾けることができるのだろう。自分の言葉で語ろうと模索することと、他者の言葉に耳を傾けることとは、ひとつの営みなのだ。

〈美〉や〈芸術〉の営みは、いつも、人間の〈弱さ〉や〈忘れ去ったもの〉の美しさ、かけがえのなさを思い起させてくれる

人間のそれぞれの可能性というものは、そんな〈弱さ〉を大切にするところから見つけ育てることができるのだ。

ラスコーの牡牛の大広間で聴いた蹄の轟き。莫高窟の石窟に、写真集や解説書に眼を背けられてうずくまっている夥しい数の清時代の壁画や塑像、朝昼夜、変容する座敷の光のなかに息づく大乗寺の絵襖。そんな出会いが考えさせてくれたことを、ボクは〈土曜の午後のＡＢＣ〉と名付けた小さな部屋で語り始めようと思った。

〈土曜の午後のＡＢＣ〉は、その小さい部屋に集まってくれた人といっしょに試みる小さな旅である。ボクは、折あるごとに考え見つけた〈美〉の破片をジグソーパズルのように組立てる旅の企画をしよう。そこに集まったひとりひとりが、汽車の窓をよぎる(現実の)断片から風景の全体を紡ぎ出すように、それぞれの旅路を歩んでもらえれば、と願う。

木下 長宏

「はじめに」(『土曜の午後のABC』HPより)

ユニバーサル・ミュージアムが「近代」を問い直す思想史と人類学の対話

木下長宏　芸術思想史／元横浜国立大学教授

1939年、滋賀県生まれ。3歳の時ポリオにかかり両足の自由を失い、ずっと車椅子生活を送っている。62年同志社大学文学部入学、66年同大学院修士、68年博士課程(哲学及び哲学史専攻)に入り、74年退学。77年京都芸術短期大学に就職、同大学教授を経て98年から横浜国立大学教授。この間、敦煌莫高窟を探検した東洋学者ポール・ペリオ研究のためにフランス政府給費留学生としてパリに留学。2005年春、「大学」という場から自由になる。同年より横浜で私塾〈土曜の午後のABC〉を主宰。『思想史としてのゴッホ　複製受容と想像力』(学芸書林、芸術選奨文部大臣新人賞『評論部門』)をはじめ著書は単行本、翻訳本を含めて20冊に及ぶ。近著に『自画像の思想史』(五柳書院)『美を生きるための26章』(みすず書房)『ゴッホ〈自画像〉紀行』『ミケランジェロ』(ともに中公新書)。

広瀬浩二郎　文化人類学／国立民族学博物館准教授

1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、触文化論。01年より国立民族学博物館に勤務。現在はグローバル現象研究部・准教授。

「ユニバーサル・ミュージアム」(誰もが楽しめる博物館)の実践的研究に取り組み〝さわる〟をテーマとする各種イベントを全国で企画・実施。無視覚流鑑賞法の創始者。自称「座頭市流フィールドワーカー」または『琵琶を持たない琵琶法師』。最新刊の『目に見えない世界を歩く』(平凡社新書)をはじめ『ひとが優しい博物館』(青弓社)など著書多数。

アクセス

■小田急線「東海大学前」駅より徒歩20分
※「東海大学前」からバスもあります
■JR平塚駅よりバス(東海大学行・秦野駅行)にて約30分、東海大学正門前下車

なぜ僕は点字にさわるのか
点字は、目の不自由な人が自由に読み書きできる文字である
文字は線で表示するという見常者(多数は)の論理にこだわらず、
　触覚に適した文字として提案された点字
点字を構成する六つの点には、常識にとらわれないしなやかさ、
　不自由を自由に変える力が込められている
点字は、触覚によるアートである
わずか六つの点の組み合わせでさまざまな言語、数字、記号を表せる点字
人間、世界、宇宙は一つの点から始まる
点字の小さな凸点には、少ない材料から多くを生み出すしたたかさ、
　森羅万象のエネルギーが宿る
読みたい・知りたい・深めたい、書きたい・伝えたい・残したい
点字は指先を刺激し、新たな好奇心と行動力をもたらす
さらに先へ、さらに奥へ……
点字を読むとは、手と頭をつなぐ能動的な身体運動
点字を書くとは、世界を震動させる接触／触発型の身体表現
点字は、さわる文化のシンボルである
点は文字、文字は文となり、人生を盛り上げ歴史を掘り下げる
点字は人生と歴史を身体に刻み付ける

不規則かつ規則的な点の配列は、僕たちが地球に触れた痕跡、そして生きた証手を伸ばせば、もっと触れることができる、人生、世界、宇宙に

点字は、大半の見常者が自由に読み書きできない不自由な文字である
僕は時々思う、
見常者はさわらない、さわれない、さわらせない「拒触症」なのではないかと
点字が読めなくても、指先をくすぐる凸点の心地よさを感じてほしい
点示が書けなくても、一点ずつ白紙に打ち出す手の感触、音の響きを味わってほしい
不自由を自由に変える力、森羅万象のエネルギーを体感し、
　みんながしなやかに、したたかに生きるために

広瀬 浩二郎

『目に見えない世界を歩く』(平凡社新書)より